

あまのあはれ記

和書門			
ニ	八	二七五三〇	類
冊	架	函	號

内閣文庫			
一七〇	二	二七五三〇	和書
函	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 27530
冊數	20 (4)
函號	170 268



花右平記卷第七目録

後前田登海の海軍以事

横河松平所外中山合戦事

後中岡高が蕨滅いさこの事

防列右田合戦を事

後列柳田賊討退事 付舟本懸義之助



花右平記卷第七目録

前志事記卷第七

佐々木國定為城軍事

去後不純友が討ちとて、（佐々木）陽乃へ向ひ、（佐々木）乃佐友系倫實六
 子餘船と引率し、二月十三日小都波まで、二百餘艘の兵船と
 比へ同く十九日乃佐友討ち、佐々木國定為推察せ敵の陣と見渡
 せ、東乃洲崎の海乃面南小十町計、（佐々木）不次く屏風と立
 せ、（佐々木）如く切岸波疊々上、（佐々木）不屏と塗こ重よ、（佐々木）櫓と松木のあ
 せ、（佐々木）海乃中、（佐々木）丸楯と成り、（佐々木）打ちを候よ、（佐々木）馬と走せ、（佐々木）下も、（佐々木）北接へり、（佐々木）南
 北、（佐々木）後、（佐々木）兵船二三百艘、（佐々木）海乃中、（佐々木）也、（佐々木）横矢と射人と支へり、（佐々木）城中、（佐々木）二、（佐々木）道
 圓乃武士集り、（佐々木）ころし、（佐々木）之て、（佐々木）白旗赤旗、（佐々木）裾村濃、（佐々木）稻葉、（佐々木）裾濃、（佐々木）月、（佐々木）望水
 濃、（佐々木）流帆、（佐々木）魚、（佐々木）真目、（佐々木）遠、（佐々木）福、（佐々木）遠、（佐々木）村、（佐々木）子、（佐々木）鳥、（佐々木）雲、（佐々木）翔、（佐々木）朋、（佐々木）映、（佐々木）勢、（佐々木）此、（佐々木）多、（佐々木）方、（佐々木）知、（佐々木）
 任、（佐々木）中、（佐々木）色、（佐々木）紋、（佐々木）畫、（佐々木）所、（佐々木）旗、（佐々木）口、（佐々木）又、（佐々木）百、（佐々木）流、（佐々木）浪、（佐々木）風、（佐々木）翻、（佐々木）翻、（佐々木）七、（佐々木）綿、（佐々木）と、（佐々木）統、（佐々木）と、（佐々木）

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

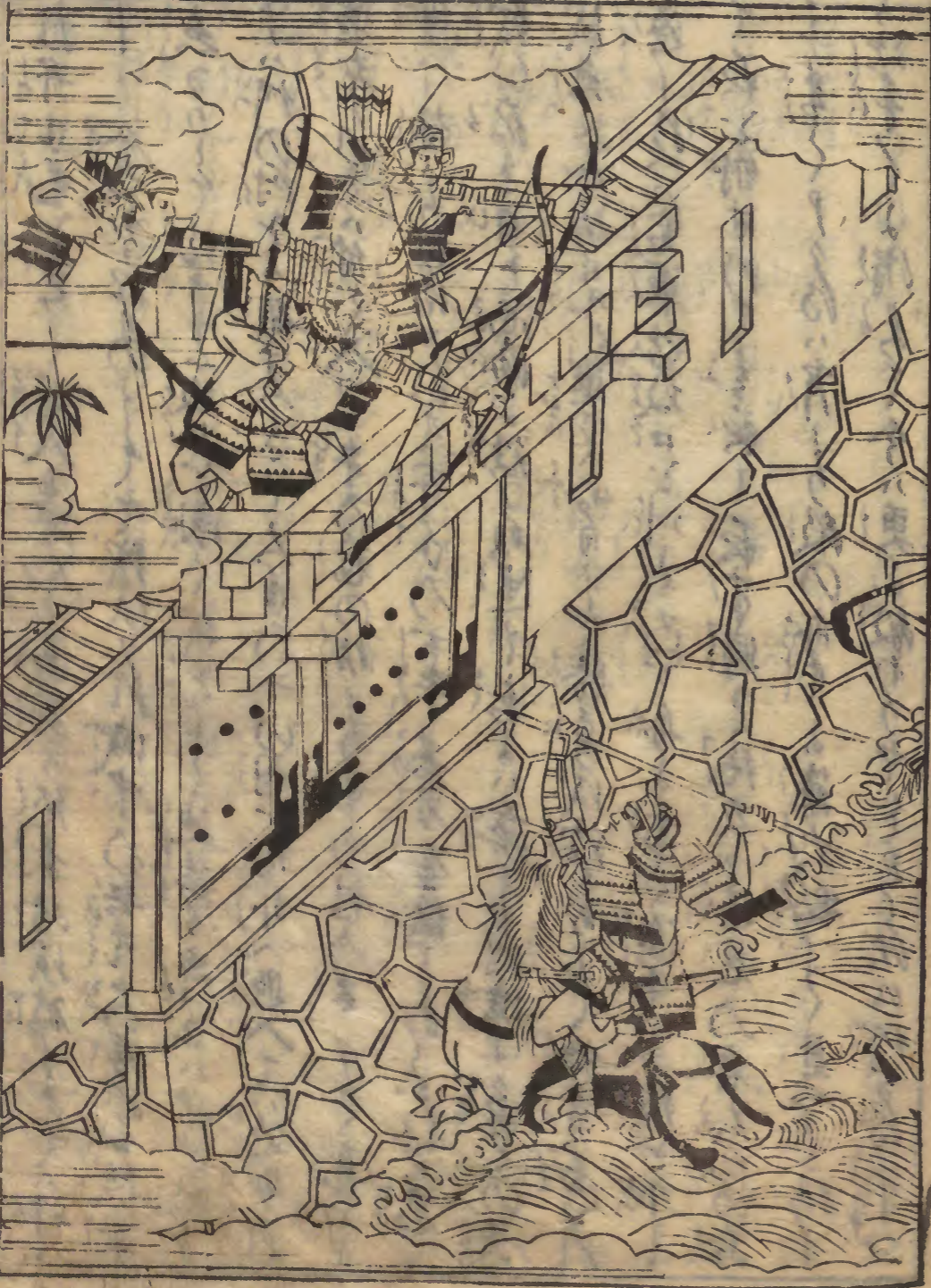
くすり 雲と先紀 浮浪 舟の勢に中より 水練の達者 又平人 傷
て 名物具 脰葉 海中に 冠績と 板百枚 打せし 舟に 殊一本も 不
砂板と 捨子 雄乃 兵吾 船十艘 廿艘 け 漕客と 運後 する 舟
照下し ひとく と 打撃と 振楫の 漆櫓の下に 打寄て 唯一 操ふ
と 振合 城中に 八鳴と 静りて 横矢 差矢 差別りく 射と 射
より なる 家と 黄緑の 版巻 着く 操鳥 櫓子より 白後 の 舟を 走
は 男櫓の 狭間 け 板と ひとく と 大音 聲りて 名物 なる 舟は 高回
乃 任人 川邊 小浜を 昌澄と 尸者 して 作と 後 遠く の 所と 多く 或
逆乃 由下 向して 作板 何と 裁と 存せし 兵知 法 甲 酒乃 海 なる 事と
世 舟 没し 舟に 似り 高回 乃 振 浪 兵 遊と 少く 剣を 垂し 是と 七
乃 由 響 應し 舟 作し 一 夫 突く 物 具 其 真 の 程 と 由 快し 以て 下
値より 弓の 弦と ひとく と 大 東 舟と 押る 舟も 振 反 引 攻 射る 矢

了 村の 間と 二十 三 騎 射 あり 磯 打 舟に 漂 泊 寸 去り せ 舟
進 兼 楫と 多く 支へり あり 舟に 丹 波 國 乃 任 人 葦 田 與 三
軌 席と 云 者 あり 今 度 此 催 促 の 勢 乃 申 して あり 一 宿 於 乃
事 有く 石 清水 八 橋 官 小 指 乃 舟 追 河 使 の 下 向 上 兩 假 令 催
促 多し 是を 知る 時 節 上 生 合 軍 功 と して せし 是 祖 の 名 と 顯
子 孫 志 願 せ ば 祝 志 あり とい 道 あり 地 加 へ 今 日 の 一 陣 舟
居 たり けり 肌 乃 六 鑠と 著く 至 上 小 黒 絲 の 履 二 兩 重く 草 摺 長
小 着 あり 同 毛 乃 大 牧 甲 小 草 類 也 法 小 子 胸 高 膝 襪 遠 所 乃
く 襪 乃 楯 乃 面 乃 懸 せ 出 立 たり 舟 乃 けり 八 川 色 殿 の 舟 乃 勢 也
一 勝 見 所 多く 舟 乃 遊 され 仕 づ 物 式 供 某 乃 鑑 八 威 毛 一 毛
見 若く 仕 へ とも 多し 撓 楫 へ 仕 へ 恐く 八 誰 人 乃 遊 たり 仕
仕 夫 也 とも 多し 名 物 なる 表 とも 多し 舟 乃 事 有 たり 上 常 たり

自賛て作と川を殿乃出たさゆやく一矢情も度作沙と遊
 ろく作と弦走と敲て二王去やも去りけり田澄常く廻りさ
 敵の廣き哉能何の舟流るるややう射通さてわんごさうあ
 頭骨射斬くをわんごさうと揚言て且三寸り餘りてさうり
 大鷹股と抜物一鼻沖引てさうと一矢はり作らん受も出せん
 とて三人張よ十三束之伏忘り計りあり弦もさう兵ど
 教川葦田の早も射て身と沈て首級女一傾もさう甲を敵
 敵うさうと中つと急の流るる切さの甲あかり矢の流ハ
 徹廢小推より葦田の音聲揚るるも物兵に射終り夫の目
 中と外一物事進比詰るるは抜舞但敵は各業しけり威
 香さん勝りゆるも實と陣と隔て遠夫も射んと落六騰落ん
 頭もさうりも寄合せてさ刀打の勝負さ中へ叫ひは

一や勢く明篠の叫く笑ひるれ後ろの兵船百餘艘と敲
 揃と鳴り同音り叫を笑ひる川を遠夫射揃一飽も敵
 一勢も今ハ命生くゆる人高乃ぬ糸一々も切死る人さ一
 族も位早餘人一乃閑と廻り用と降と並へ切く出く寄さの
 船も糸綴りて面しゆと軟ひる寄さも最前川をさう中
 て沈るる者も親親兄弟身餘あわらるれ我付留く教書小
 せんそ我も切くあつたれと斬付の戦も敵の方をさ負死
 人六七十人さ度り帳中へは是と見くのを討中を淡節と推
 亮絶素二百餘落あて打く出火成射して我れハるありけり
 知し和泉紀伊の兵小舟二十餘艘東乃切落し漕寄せ絶
 素が勢も八目しゆの決直し城中へ行て入んと奮あそあり
 けり絶素ハ入ると瀆の敵攻打控返りて支へり船が

三ノ巻



前巻



餘艘ハ彼中の酒水舟ハ傳所跡の舟ハ八舟高松室飾摩丁
忽不又十艘二十艘げこひく上漕寄せく相寄の日とそゆ舟
ハ此舟敵如何くせりらん純友奉事し向く下知しりるま
あす敵ハ皆又美門乃無きされし傳あくハ惣共船中七の敵
ハ海くわくく次方れ共ハ皆城をゆく船ノ宗敵也ハ舟
船の戦いまし又松亮純素ハ兒島の澳乃改通ハ舟と寄
て軍最中の耐便らんすかより敵の後と避るへしそせゆ
軍れ日分とそるりりり倫實ハ此方の謀敵ハ傳きて又
船と更くゆくとそて然し事んとそせゆ舟の共を船
は又日経ハ公青や寄る明取ハ立く攻来る人づりそそそ
後と活くゆとれ共敵殺く寄るりるれと云ハ虚伝とそあり
けしそそ忽横濱つあつハ宿くハ頭城は女と中寄也團共船
六とわく日瓜常りあつハ酒宴り解成催され春乃取の舟の
舟中を舟と運り一向用人の體ハありり倫實是とそ澄し然
舟ノ舞とそ燒け付大船とそ揚守二月廿九日の間ハ舟ノ法方
一夜ノ推寄敵船道く如く大敵とゆハ船と敵く因と出と上
舟敵の舟ノ宗掃り遠回りの如く切く蕙乃防兵な方と共ハ敵ノ
舟の物多つ後小船とそ渡りあつハ艦ハ舟ノ檣とそ或ハん
せゆろは箭打着ハ上舟更と傳せめり大將純友ハ敵中より
是體と見え敵と陸上立とハ舟の傍を了と打て出陣と堅く活
りりり初大敵の舟ハ礼呼喚と敵ハ一船ハく敵今寄るこ
と思急りりれ多くハ空肌ハ長者とそふと此彼ハ射也切也
らと波上り漂ハ海屋ハ波ハ海東と寄事ハ紅瀬ハ舟なり
わしと此敵唯今落るしそ我人よりけり松亮純素ハ改通ハ舟

六とわく日瓜常りあつハ酒宴り解成催され春乃取の舟の
舟中を舟と運り一向用人の體ハありり倫實是とそ澄し然
舟ノ舞とそ燒け付大船とそ揚守二月廿九日の間ハ舟ノ法方
一夜ノ推寄敵船道く如く大敵とゆハ船と敵く因と出と上
舟敵の舟ノ宗掃り遠回りの如く切く蕙乃防兵な方と共ハ敵ノ
舟の物多つ後小船とそ渡りあつハ艦ハ舟ノ檣とそ或ハん
せゆろは箭打着ハ上舟更と傳せめり大將純友ハ敵中より
是體と見え敵と陸上立とハ舟の傍を了と打て出陣と堅く活
りりり初大敵の舟ハ礼呼喚と敵ハ一船ハく敵今寄るこ
と思急りりれ多くハ空肌ハ長者とそふと此彼ハ射也切也
らと波上り漂ハ海屋ハ波ハ海東と寄事ハ紅瀬ハ舟なり
わしと此敵唯今落るしそ我人よりけり松亮純素ハ改通ハ舟

舟ノ舞とそ燒け付大船とそ揚守

二

軍飽して敵と偽ひて河分りて相討つ積りて後連て
切く出元来敵ハ大勝を遂ぐ中水取築一人も餘りてせの
より大に急りて分知し楊尾有る元来敵の橋合より旗乃と
す先濕雲の面沢帯ふどくも一文字ありて斬れりて純友
ハ是れんく敵ハ荒を加りしと後と反巻をぬき小川返り馬
走是れんく此よりそを勢の分際とらんく戦へしそこの畧といさ
ぬせと又舟乃山の岨りな後つ伏倫實の七百は一なま出せ
突く出元を塞ぐゆゑより純友撤り大陣ありといふと三方
より同時に切く蒐りける間何きは向く戦へしつゝなとあひ
戦と春はわされ果くと扱へり二方乃官軍入乱き此は藤伏也
彼も切也分捕る名候より純友も此は己も討りて足
より一標山治部を子孫門子子孫後十八勝返る也防矢射也
此回虎口の苑と道までハ治り毎々去り遠くゆりへゆりたり

備中回多嶽敵軍の事

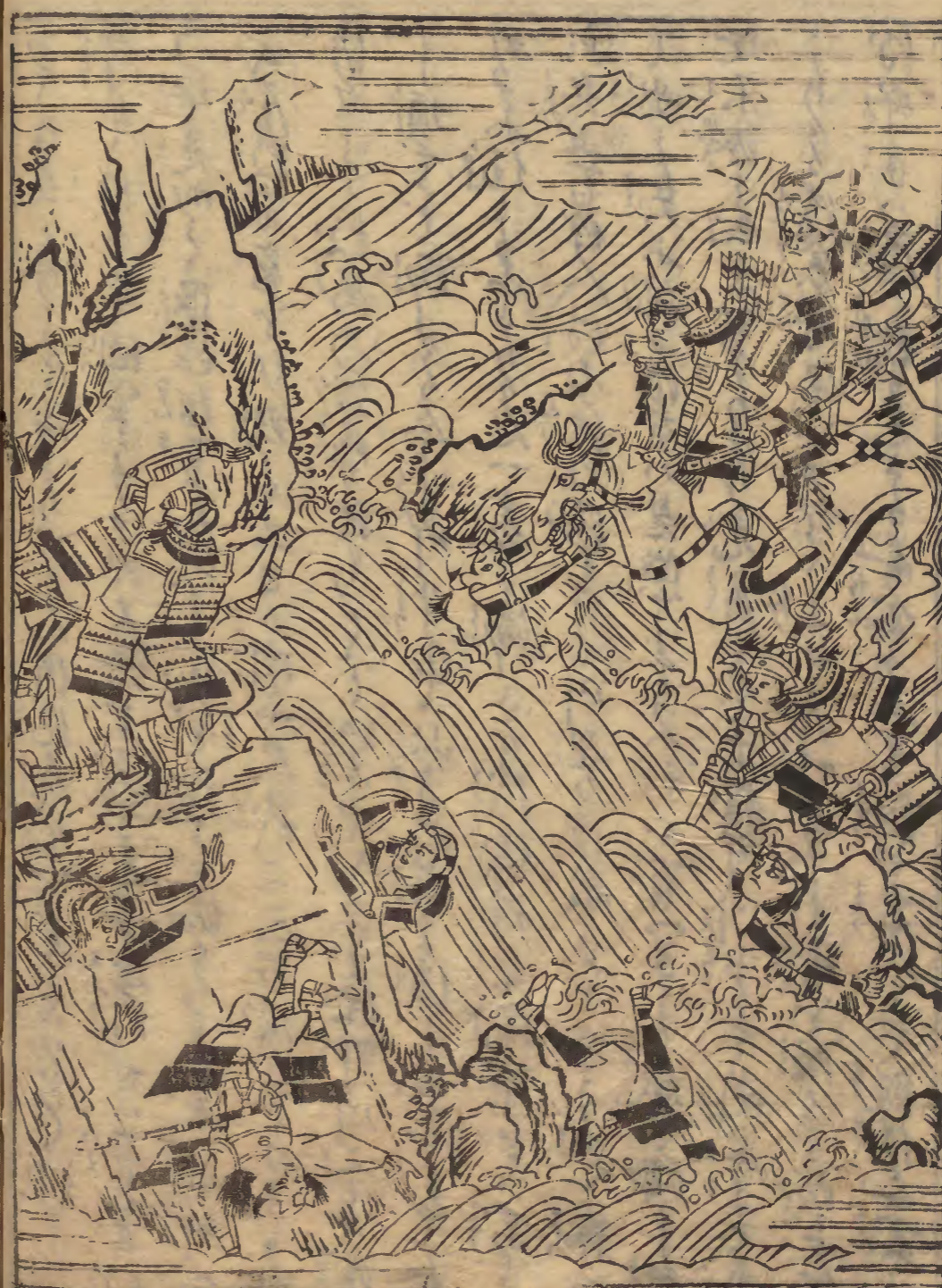
赤松守純友ハ善く此傳定ハ八束圃平相門を向略まで攻上り
は純友ハ後山為小陣と寄也一町小帯約と攻へしと將門上流
を今やくと約如小却り東より一揆悉く滅され三月廿八日ハ
將門が首事約小より梟本小懸ぬく時々れも精と病候と
あひ如何ハせんと思ふ如よせんぬり十二日ハ安藝回へ向なり余
弟七郎石史純行僅よ討され同月廿七日ハ香納八列返す又
伊藤圓日向ハ一赤右衛門伏純乗も始ハ二子と純とあへ二三百
勝小と足守と小舟一艘も常くゆりもれも留連とあひ又宗
後乃一族齊集く評之意見區々なり兎角勝と法方へ分六
しと味方小勝もゆく利とあひつて今度ハ味方の軍勢唯一



前
之
御
所
九
卷
七

いふにけし小馬打入るは流りたる元東東方八瀬流へて鞍
 の尻尾に菱縫の板をて漬すはかりける人沛艾乃後足なりは
 彼と流立流と仰ぐは流りける川端に掛へり二子にたをと思く
 川流りけるは流を思ふはて打入く至り答と夜く
 東山出て流りける流急が勢些とて踏んたを思くは
 流と流人指取川流射りける寄の八敵と小勢と見悔りける中
 こそ淵流を仰ぐぬ大河と想ふ流りける川中へ流り流り水ハ
 深く流早し流りる岩小馬は只と蹴く川上るは兵士は流り
 泰倒とすりて一度は將ひ流りてとわきなくと脚んとすり人
 と亦同候し押流され二子にた乃兵を命と仰りけるは流りける
 方の兵同音よ天晴流せと先陣をを懸くはとて笑ひし止り
 かり寄の八敵は流りて思ふも唯今思ふ事なは流りて可流候と

あくは流と想ふは流りける人將絶友是と思くは流りける
 守居られしと候事しりた大河よまゝと事流りては石見兵門
 の流走加く退治難多しゆへと後と想く流りてとて進御の
 氏屋敷百家と打毀く二日か明ふ大兵二三百程とありける
 流せとて教萬乃軍勢我りてと思く二十餘町川上り流
 へり順を思ふは流りける今事計とて此方れ流り着んとあり
 ける小何とありける一藪に流りける我職強繩切とて流り
 ける兵士百餘人流りける流りける川迎るは敵を思くは流り
 てる咄と兵小跡るは者ハ見懲りて又流り有るは流りて
 て不流と云ふのありける免角とて十餘町川下りて漸岸よと着
 たりける流急勢是と云くは流りける川上りて金と流りける
 流りける八度と流りける流りける金と流りける流りける
 流りける八度と流りける流りける金と流りける流りける



源平合戦

懸たられしを由陣の負元人妻子人云ね成るるに逢巻の
 了流の法金勢身命と情守御成と久し敵の大衆を
 入るく残る同路不打ちて結乃成へと川守寄を勝小衆と
 北と進ハ浪名に激子推寄唯一叶小探落んを攻らるる抑
 此城の西南一方ハ平地は修らるる巖尖く苔滑し何
 所後るるや上り事有くくく見入らりける東ハ谷深く
 萬蔓生茂く総切存屏風と云ふゆきく後ハ大山連り集
 不防く容易はるるやありける城中の昔多子の衆内
 都よりけりしは彼は攻合用合く射は寄り更に押せ
 多しハ幕幕は知りぬ何程の事有くくと擁乃夜と突る色く
 湯を連てをよりけるは城の関に今に又攻る程は見ぬ一息
 て危らりと城の中ハ起り見意の事有くくと車馬乃出屏の上

り大木大石五六十一度は發と投急らるる一陣は進ハ傷
 後かの衆三百餘人真例は推寄され或ハ馬は踏殺られ或ハ己
 方長刀は突貫してお方ハ安人顔と成り人馬より上
 擧げたりしはは陳の衆ハ是とくく射て不進傳唯一所
 了程く時と形を計りけるは相挑くは五六日ばかり
 せしは城中ハ些と不弱寄ハ毎日二百人三百人負元
 といふはとら事ありは従反吃と出果しやく僅ハ一城は多く
 乃軍勢と貴しぬ日と送らハ味方乃士卒援と助ハ流方
 敵起つるんを束し一族ハ数人と擧げ又千は死あく城と海也
 同月廿三日長門國と向ひたり

樋田徹明退軍 舟本頼義列傳と事
 家よ長列樋田の城を浦上大河分康後打是在ありて出りける

中もすむる後ありを何れも空く止らざるまぬれ皇衣靴を嘗
 一法神モリガ新いのつとまよふを依たの福ふく本もとこし舟ふねよの依た一
 本もとりしてぞ有ある皇衣かうい靴かあの子こ恨うらみの即すなはち本もと道の司つかさど
 一柳やなぎて由よし舟ふねと作つくらるる後皇衣かうい靴か三さん子こ樓うき船ぶねと浮うきく新羅
 岡おか小こ夷えい入いるる天照あまてらす大おほ神かみより差さ割きりの二ふた人にの荒あきまりに
 先まと鬼おにのひく多く夷えいと斬きり又また河か度た部べの磯いそをとりて
 龍宮りゆうきゆう殿どのより浮うきるひく干珠かんしゆ海うみ珠しゆ乃なり女に頼たのむるね萬よろづ人にの夷えい浪なみよ
 濟き多た羅ら乃なり三さん韓かん患うれく平へいらるる皇衣かうい靴か由よし末すえ海うみと新羅
 八や日本にっぽんのたきりと石壁いしへきの書かき付つく大おほ矢や回まわ宿しゆく禰ねと海うみ守し将しょう軍ぐんと
 て新羅しんら留とどめ又また三さん輪りん乃なり人ひと質しちと卒すえひと皇衣かうい靴か由よし末すえ海うみ在あること



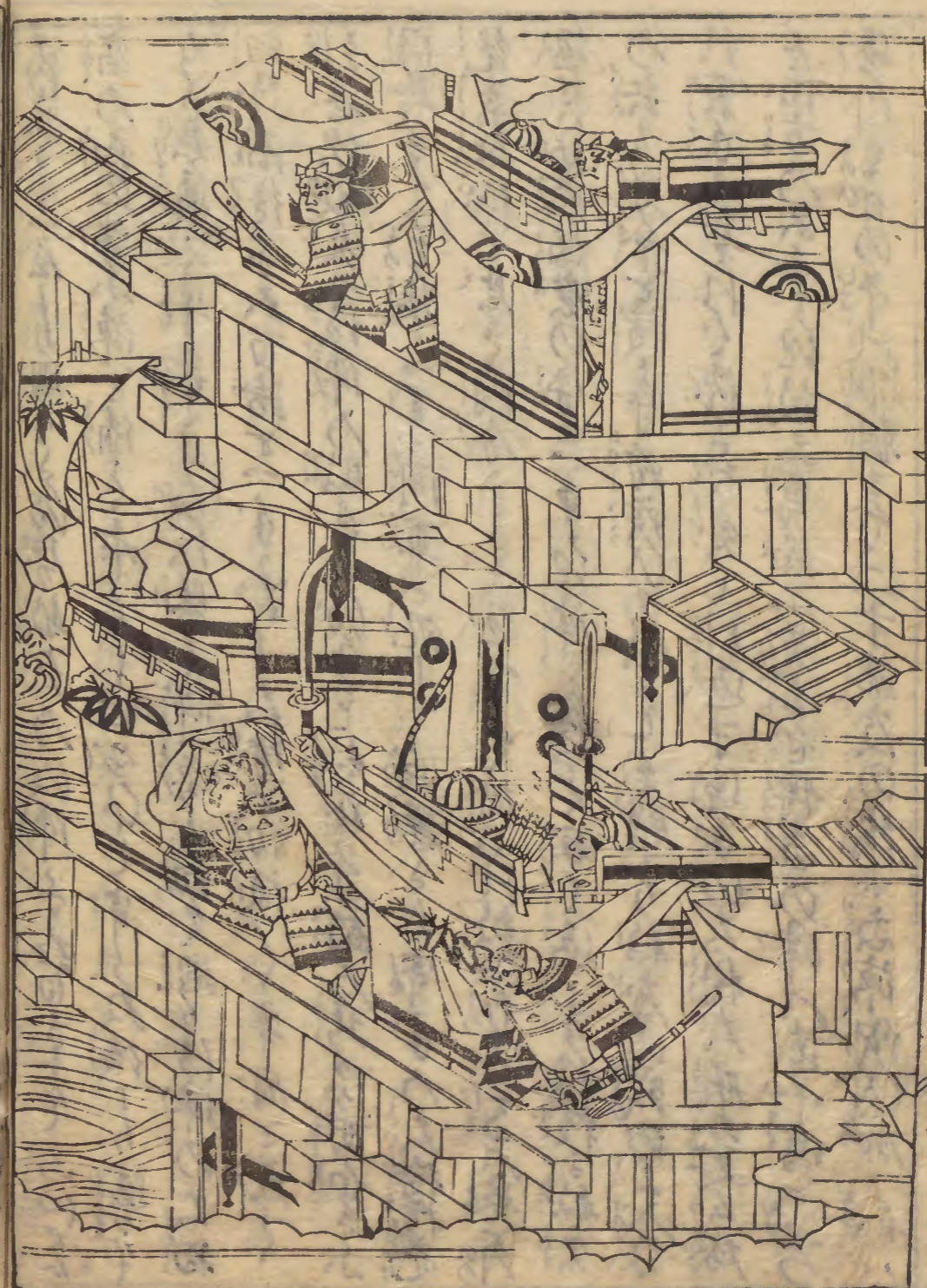
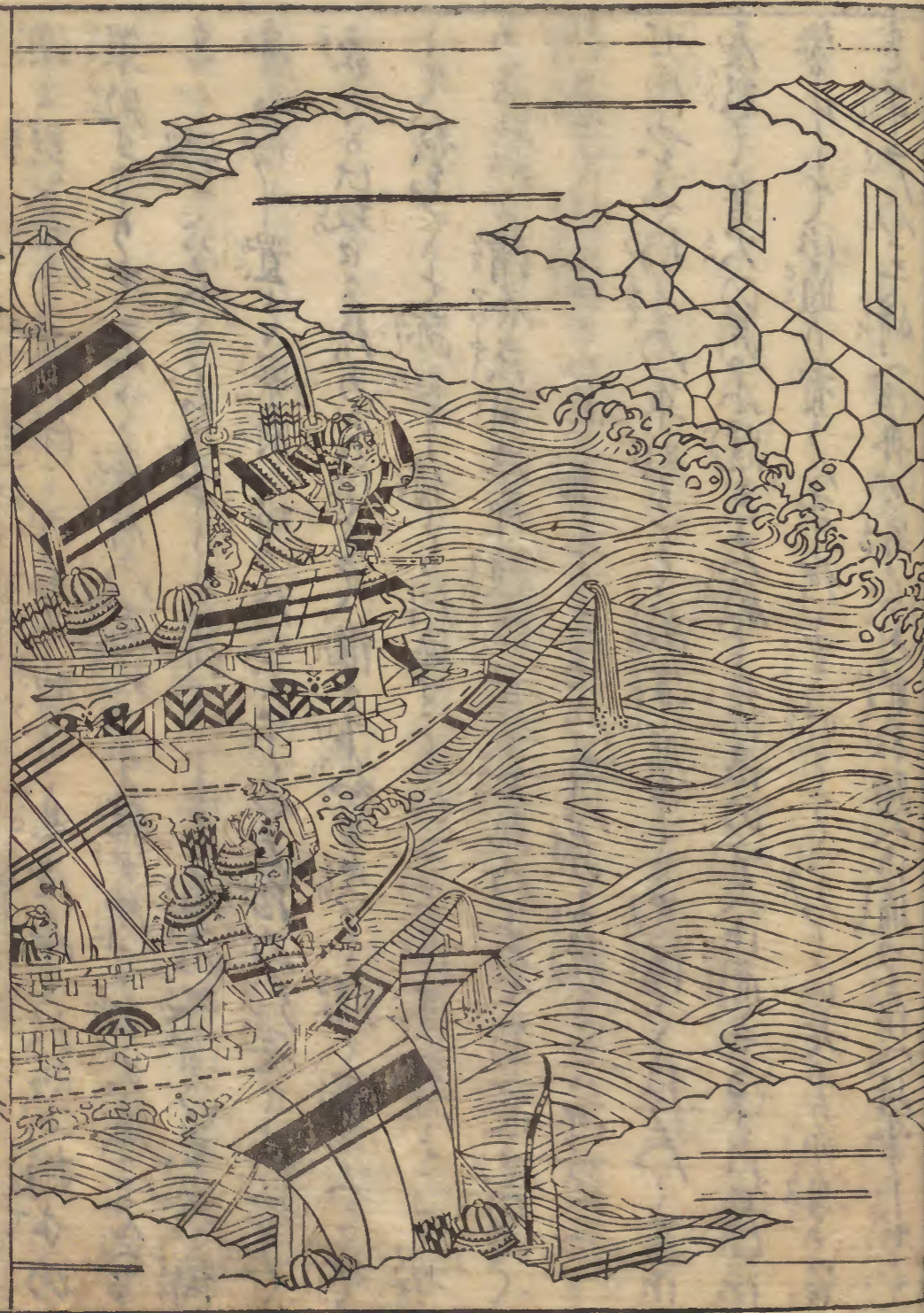
前右平光卷第八

左宰府攻中事

修儀探絶友山陽道以切庵多長門回未間ノ関ノリ纜釋と九州
 ノ押海ノリノカノレノ回中ノリノ介ノ隆効ノ仕者ハ教ノテ在也
 小地遠ハ老者ハ忍ノ山谷小隠達ノ左宰大裁中務女補備公於
 此事ノ分ノ一ノ族ノ乗相集ノ軍ハ族族區ノカノリ去程ノ八月十日
 ノ早且ノ奥ノ夜ノ晴間ノリ改改遷ノ身居セシノ頂風ノ帆と掛
 舟美子艘と云教と云ノ海ノ上極ノ大山ノ湧出セシクノ怪ノ九
 ノカビノ山陽道ハ函子先程軍勢ノ有クノト好ク語ノ中
 ノリ敵ハ是中ノ身ノ如ク又々新回柳ノ浦ノリ上ノ分勢陸地
 と厩ノ掛ノノ向ノカノレシトノ味方ノ二ノ少ノ下
 ノ大將軍と定ノ所ノ一方ノ八舍身大膳又公彦ノ巻後巻

前右平光卷第八

八



奥は渡と下し陸は渚は陣取く暫く島港居るに如く搦手の
 軍勢をとりて之を奪く宰府の南北二十餘ヶ所は其火燄より之を
 去じ初て八人をして御事しん所を以て菊池松浦の者去と博
 多小磯一置と宰府へゆり居人とするる大將乃引返り居るや
 衆はがけ攻は居りしれどもて誰が下知と多し何と軍士もさだ
 とく我らと跡目へ付く門返すま行ふ公彦宰府へとるる早
 め路の如く漕谷庄司治部恒雅曾と去知乃夫七筋兼毛のどく
 杉懸と佐澄と合を蒐まり大將乃馬はあは疏さこ八何処へ流る
 せぬかや搦手の軍勢を奪く敵宰府中へ充滿く住人へ去は
 屋敷し無火の爲ふ焼く大敵し掩後の方へ出陣さるるればはは
 勢計もその通り有る人事何ふ叶くく是より舟は居る
 是平乃三崎へ舟と寄らる肥前路へ出陣つて住人此事尸せせ

て惣大将より所暇と賜く地事して作とせられども公彦嘗て
 りく敵大將入替つてはなとて宰府の所と見ざる人八條りふ
 言申すあり又敵衆高給わりやを言財突は目を多し商家
 民屋は打入と去と一所は集るととるゆでいと無礙く通
 んと宣ひたると大伴石田等むり同して至御僅子三百に用
 り馬成打せと先公彦乃宿所安樂寺に切通しとゆくと見ゆ
 り早焼失くると至連りり宰府の山館は如何れんとるに進
 り居る中實を公彦の推量乃如く敵衆くも多敷くして一所は集
 り居るありけむと用くと居居れ焼跡と打廻て是路中昨日まで
 八さるを長瀬と盡せし一門紫園と一時は所焼とあり居る面
 影は誰人とも名を知りしと災の下は白骨と焼くはる不潔
 先之り公彦も惘然とて去去とくうなれと人々の事

之如何と云事好く之に於て打て出んと志願ひたり知の府中よ
 充満しとの敵は十方より押寄く一人を録ししとを攻より
 公彦の兵を斬り却りし事あるは些も不慮るの歸と
 鳳の連杯多幣の中へ颯と懸入り暫く後へ至接く此方
 と忍まむ二百騎計を討ちたり此儘して川に可致引ん入る共
 今日軍四方打負く信大將皆方へ引まむ為所始事此人
 朝呼南家の取獲されん敵と一殺しりして天下の人にと
 塞がハ中と云れは色しあはれと三子より作り又取く返り如
 法地年此業内者たされ此の女路は因と作りてハ彼乃切通し
 打て出射依也切也捲りまむと戦ひたり敵の連日長速に夜
 走く又今朝より殺箇度の戦よいま息も絶えりはれは精力
 弱く忽ち八方へ逃散りり忽ちけり此は船路の寄は博安の津
 上り上りて馬槍と立て襲ふ公彦尚も進まんとも歩ひしと系
 田龍後和司師後大將の赤小懸塞くハ此ハ何事とハ後
 ち也はあまや大敵の咄ん昔くもさる作もあはれは善子ハ勢
 一々攻めんと此方ハ因兵相あん事一向海より小似て作
 多し金銀乃高徒能取討せん事全無そハ作やそと人
 天下乃安危此一拳小不可限し再三強く制しハ公彦
 色此美し涙眼ありあふ存ちと向れ志見みしを従ひりて
 討たされん兵八百とたと従へく後後回へるとさふめられり

巡拂使西海道下向の事

忽ち一移小信保標純友大宰府小入替りて因へ軍勢と指回して
 背々分者と攻をせり小成ハ控隊に怖もそ海系一或ハ安撫
 て為りたり移小三月と居るは九列二嶋一人として不願罷り

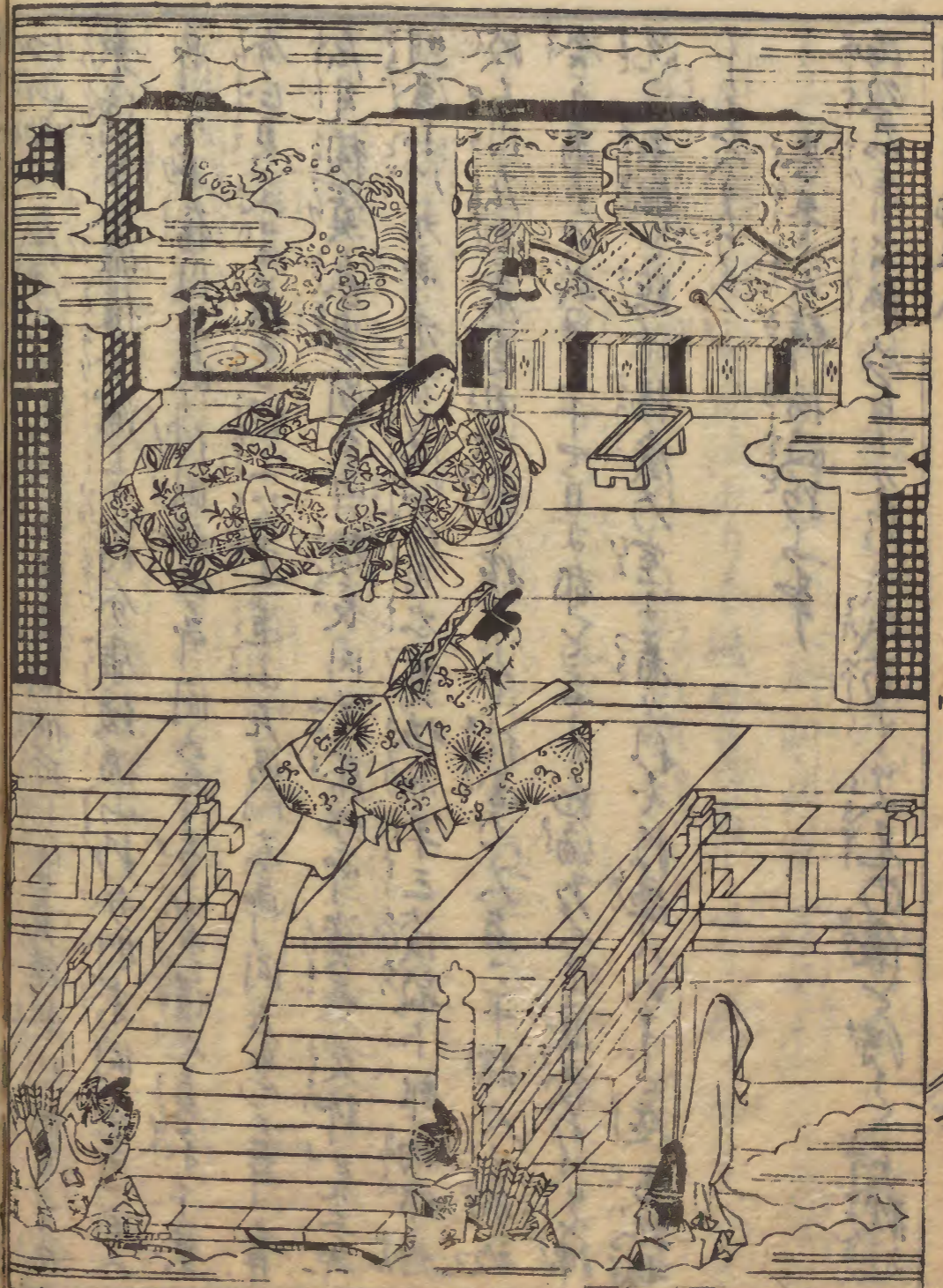
公者ありたり初て都小八身堂秀郷の武功小傳く東国志
 くまらりし八征東將軍忠文卿副將軍經基王正月上旬後
 河内清見之陣り海濱あり七賊以萬歳と叫小終る如よ又西
 乃賊徒逃けて始て四乃早馬頻重演りて言と若事際
 かりけとて洛中又よと下と返りたり重く追拂使と下る
 夕とそ右道清女將左侍門佐小野好右教佐武列源經基王と
 進子搦手あ大將とまめらる室位の人よ右侍の村若系慶
 業大系忠同去實左馬助源滿仲兵部丞同滿政兵庫允同
 後季志摩守同滿快上野掾同由生縫殿卿同由重出好月同
 海頼山城守若亮河津守小野保衛右京大夫若系政之教佐等
 仕と河津村加藤重光越前押代同侍傳同河津口貞正同武藏分
 心同城中掾重吉卜部次官季國丹波判官空同侍傳介行港大

以山城入石澤忍同山城掾雅信同修院女進貞信越前守武
 兼隆之會及濃權介浦上大内今康俊福山新分則宗同左郎 同又
 高之下務日左郎村園弥左郎同左郎左郎同左郎同左郎同左郎
 介正貞文屋義高坂上公重遠山左衛門左郎同左郎同左郎同左郎
 左郎頼資良男同左郎頼長同遠藤治部資長交野荒左郎
 時澄小川九郎元方右河左司忠貫佐介平三茂敏卜部物部丹
 波大門左本左高田入西と作とて佐介の大名二十餘人を集
 合五萬と記六月二十四日又都とまて西海舟と進發あり生海
 況よ多船と點下揚慶乃室よ着りては陣ハいまと後ち取暇
 了支へたり

忠平公辭抄改抄事

後改忠平公熟と存りたりハ我苟く又兄の儀と傳く点款延

喜之跡と進ひ位一品と極め官則漸く昇りて一人子作範とて曰
 海に儀刑より常々統百官之職為極萬機之政想ふ今
 海陽不和兵革室息天啓之責既在臣躬嗟既大尉徐防ハ
 水雨とく織と道長疎室忘ハ地震子驚て官と解寸不政
 と有回乃小還一と身以何の郷子還人ハとて解寸不政
 て極改准二官考と解一其後曰
 既新言短辭既窮寸誠未遂紀伏慙怖必倍衰矜臣某謝臣
 聞用方陳力奉上之規自存易務求切御下之訓既謬何則
 治兼金而故表接範之工是觀構散木而為材割剝之憂何
 在取命於及何遠之有臣宿修老倍蒼逐日加事與心遂同
 於及濫之取容旨遇物疾類於例表求領受松篠之勤兼甲
 海而味免官爵之賞准三宮而難為音五湖泛浪遙道珥蟬



海陽不和兵革室息天啓之責既在臣躬嗟既大尉徐防ハ

水雨とく織と道長疎室忘ハ地震子驚て官と解寸不政

之榮萬隆地恩更返看幸之肆是則讓功不居辭賞不
受攸猶若此矧於愚臣縱招臣弟逆旨之咎寧遺吾君
安施之名乎况急填不困重門有警隴頭秋水白波之
青回夢急憐曉雲綠林之陣不支仰恐先朝寄託之重
俯乖聖世康和之風豈非委任失材致此災變乎朝慙
然惕寢與之聊抑魁首將門默心人面結黨聚徒公行
剽劫狂謀不悛猶同朱發之賊野心彌熾不異白額之
禽陛下皇威遠振玄德潛通決戒之誅未及神明之戮
先加幽顯合契身殞於一箭之前逖適同歎首傳於千
里之外開陣以來帝王之跡夷凶息暴未有如而今連
者也微臣筋骨疲衰犬馬之力難展陛下聖德鼎盛日
月之光彌新以此施化之恩不服願曲廻如輪憐此匪
石早停不堪之慘亦收成功之重賞天地覆載之仁躬
襟而化下春秋生殺之令决激慮而撫民樵父野老謗議自
停餘燼遂孽逆心長誠不勝悚懼屏營之情謹重拜表陳讓
心聞臣某誠惶誠恐頓首死罪死罪謹言

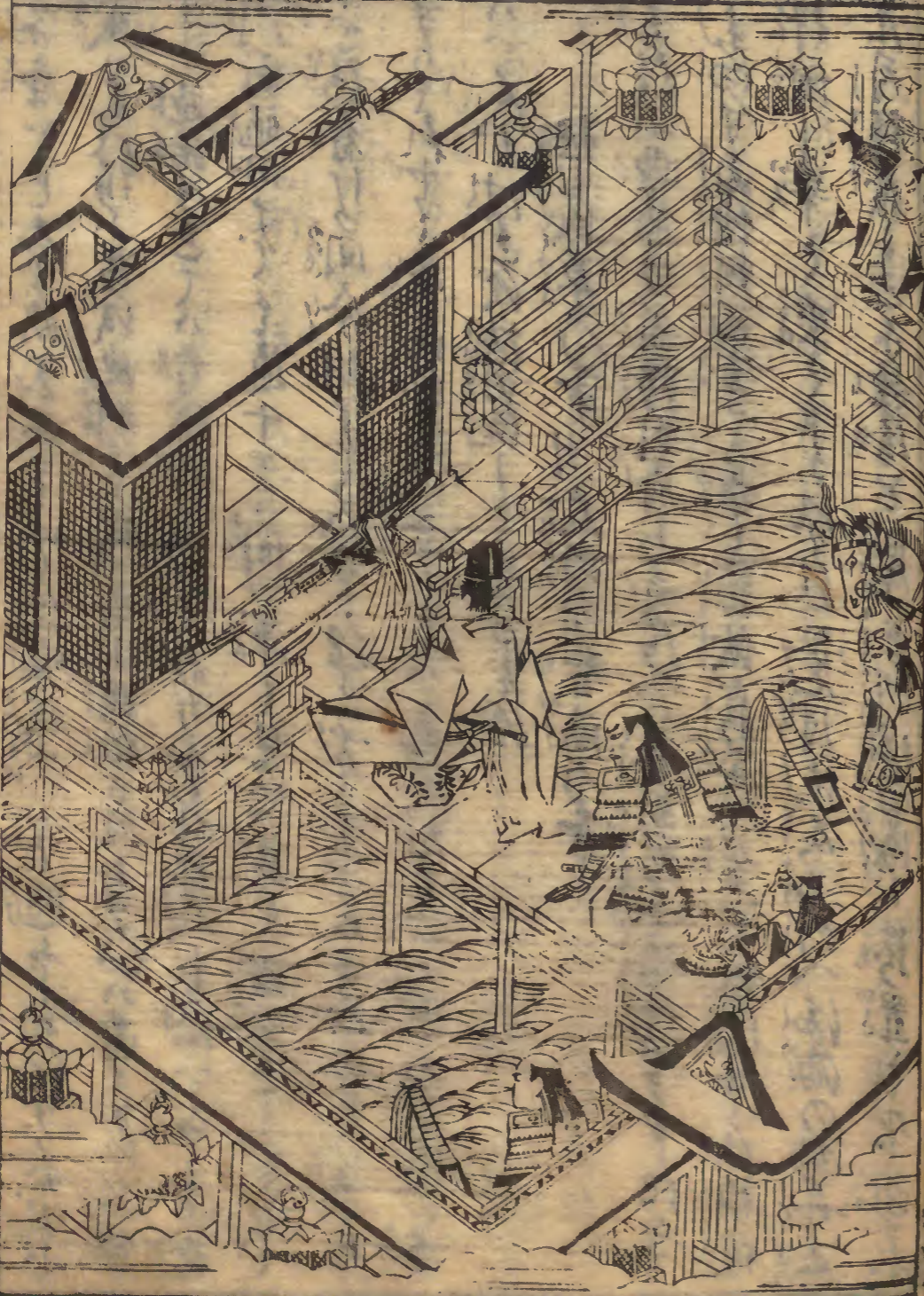
太政大臣從一位藤原朝臣某上表

天慶三年六月廿七日

至上此上表と敷覽有之彼仰下若何八音湯王有表朕躬有
罪無以萬方萬方有罪罪在朕躬今臣表已起八荒不安是
朕之不德也依是行何由罪於爾之則何彼上表と彼下官
爵辭退乃八勅許ありりて表す一表と信臣と信成と表す
と崇事と皆人儀と為りたり

後念此并に取北の事

七月朔日遊捕使安藝乃嚴防へ船とをり一日も露あり就り
 突銀と被刺奉幣事終て故地所より陸路と懸く固防者門
 の敵を攻く山陽屋乃深と付多落葉と表分今と深立有て
 船よりより船を南河ハリに及ん次播磨美作備前備中備後
 出雲伯耆丹波越前等處に及んて船を人まで就終てと他加り
 多行終て不意處のとくも先渡り家不えわはり防別深窓と
 圍ふ賊徒此事と寄くとく長居せし敵の大勢後と有るハ
 船引舟在る所よりとく七月日浅倉の舟五中紀名門圍
 引く船中より是とんて三子と終て追北は内まてを并て
 又子と不終りつれど大將草壁因幡分良運は力とく軍と入と
 さゆと終るゆと官軍大勢と攻下りし用懼して一是と
 遙く引くハ船りんとと終る矢とて打撃て又子と終り難と



谷原ととちり次忠之とて原唯我之とて逃之とありけりやせふ
或ふは折ふ馬代地例一我の馬と踏殺されりし八道より谷原
一逃之とて八首代捕らるゝとありて眞無人主將とらるる長
門因通田までを道十里間一軍も其一とて踏留まらざる
小倉着けり今朝もてみ子とて突しつゝ子孫少も其より
りりたせとて徳高村の得分あり一教小引きけり故に室後の者
二人今徳高村梅田城とて築つる也

梅田城軍の事 村大川が智深の事

去程小迫捕使周防回府小倉より八奈周防介頼種官中にて
頼向守あり侍封西有て長門筑紫窮屈以方と慰問せり頼種
頼向一畢く重くしられしは先月北友九州へ海海の舟舟本
唐司頼我よこ子孫孫と頼向長列梅田城と築置て作態ふ

今度後余と圍りし津と波城は逃給て作中然るハ軍勢七八子
孫と作し平部中梅田城ハ長列第一の要害と作ハ敵の足
ととらむとそハ梅田の害と存し先在津と進られ山邊亦有て
やとられしとて大將一とて河邊に小野保衛と大將と
てみ子と則則奈周防介と兼内者小相添お勢合て一萬餘人
梅田の城とて向れり多し官軍の中より大川介康俊ハ七列梅田
を城主なりし今度在京の留守の間絶友が病小波と奪りて
多し従類と行方あり候と聞て憤つて一事不斜怒ふ今度
彼城ハ保衛頼種とたると賜りし事あるに事ふし人
等不向くしられりしとて我相傳の居城と敵は馬の蹄と奪
剩へ所領も不易とて不康若と行末なく其いふ人今ハ我命
何の用ありし階都成之り日より初く行時を早く梅田小下つと

奪返す此情と一教とありよ今夜の討ちも減りて事をも逃
 恨む運何と世謀成廻り一機と棄るく天下の人志日小録の程の
 事とはく此勢懐と教を人ともふ何中とされども家人等病
 とは下へむり同くありされども伴の機要害を在く而し外の患
 たる入使つるに後よ揚人置ふ事なれど何れより二患入方便
 多くゆて身とも極く意成碑も相謀るくを東階不防府とま
 同く極度向ひたり去程不明なれど七月七日官軍樋田と推せ二
 方より攻上り進上り進下されたと申して控城いりる元米城の寇
 竟乃勢所より兵八中記して後つるれど官軍も攻むるを
 是より多りたり此日乃曉業よ大内分康後其身ハ甚く威
 毛見苦き黒草成乃曹着と軍勢の中よ打交り家の子中山
 乃次道朝と聲花は僅りせたと申すも申すも申すも申すも

差す並符とて不付用とて西の尾海より我よりなるは敵居回
 中津國乃者昔も進んて足利も下りたり官軍より敵中妙と
 敵と味方と見え之のむ雙方軍と止く事れ極と伺え
 傍り坂中とて旗差揚大着して呼りけるハ是ハ旗紫より城
 中へ後攻の為より指し向ふ勢の中後前國乃任人多々良利
 介宗秀也て作今日下津乃淡と着くは今日軍よ進んる
 援鬼して是今此の地氣とて城の中の人と女と是ハ山出有く我
 我ハ剛腹の程と覚て後日れ檢證と立らゆ人と聲とよ呼ら
 て寄らり向く時の聲とよむる官軍と實とて意のくたハ
 敵と有ると見え通せしと奇怪され一人を城の中へ入とて
 先陣の兵子又百にたまりてあそぬりたり大内分の兵甚多
 多痛くと不戦遠去と射せく城乃方へ引上り城の中ハ是

是くわき出向く四方討たれも一二乃開て用く八百に降と
 並く打て玉敷くよ強より大向分れ兵多多くの敵に方と出核
 て八百餘降よ打交りあき城の中あぞ入ふ多の敵りし行よそ日
 と早言ふ多り大將舟本庄月輝我兵不降意のた相草壁固
 懐介良連へ中山才次が大將の言して居りけりて實の筑紫
 衆多く良約介ぞと意のよく意を對面して九州北征と同よ才
 次小賢と男とぞ知すりて居核よ彼ハ加修の作地ハ云く的事
 ぞ作中し城一やうお降りり舟本重く軍の意思と問るれ
 才次降立直りしれん今及重降と九州へ不降向固を去て
 る且ハ此城の後攻するふと軍降二萬降して宰府と互
 作が居る陣と降と約法へ人あよ下津の渡よ舟本重く相降
 意のめりハ此城へ州着はれれん平怒るハ敵大軍は後と卷る

一としてまき敷北で修を以て向ふよりこの少少不降と
 敵ハ般し作んす中一兵向固の固めよら落置く作中降北は攻
 り敵と捕もせ取切と他よ讓えハ全意の事とて中又重降
 と先登りて中柄の行をし人よかえんとそ中作よ海上不
 意の降乘りて今日重降あし不降久ハ重く意と懸心以よ
 又筑紫降不敵と捕もせハ跡先蒐志より甲斐より重く意ハ以て
 敵ハ大降乃に攻と重く懸病神が村を骨二人と心乃落着
 と居者作中今重敵陣よ夜河せと子よ一河と敵と不降降と
 重降不可有いしは攻の降れあふと一勢りり作中面
 面乃に武功又宗秀と先登りて河面目より重く意と懸心と
 勵氣として降るれ居此城あぞ同くは打卒とて城
 中よハ兵千餘人降し留めて居重乃子此越計よ城と出重の

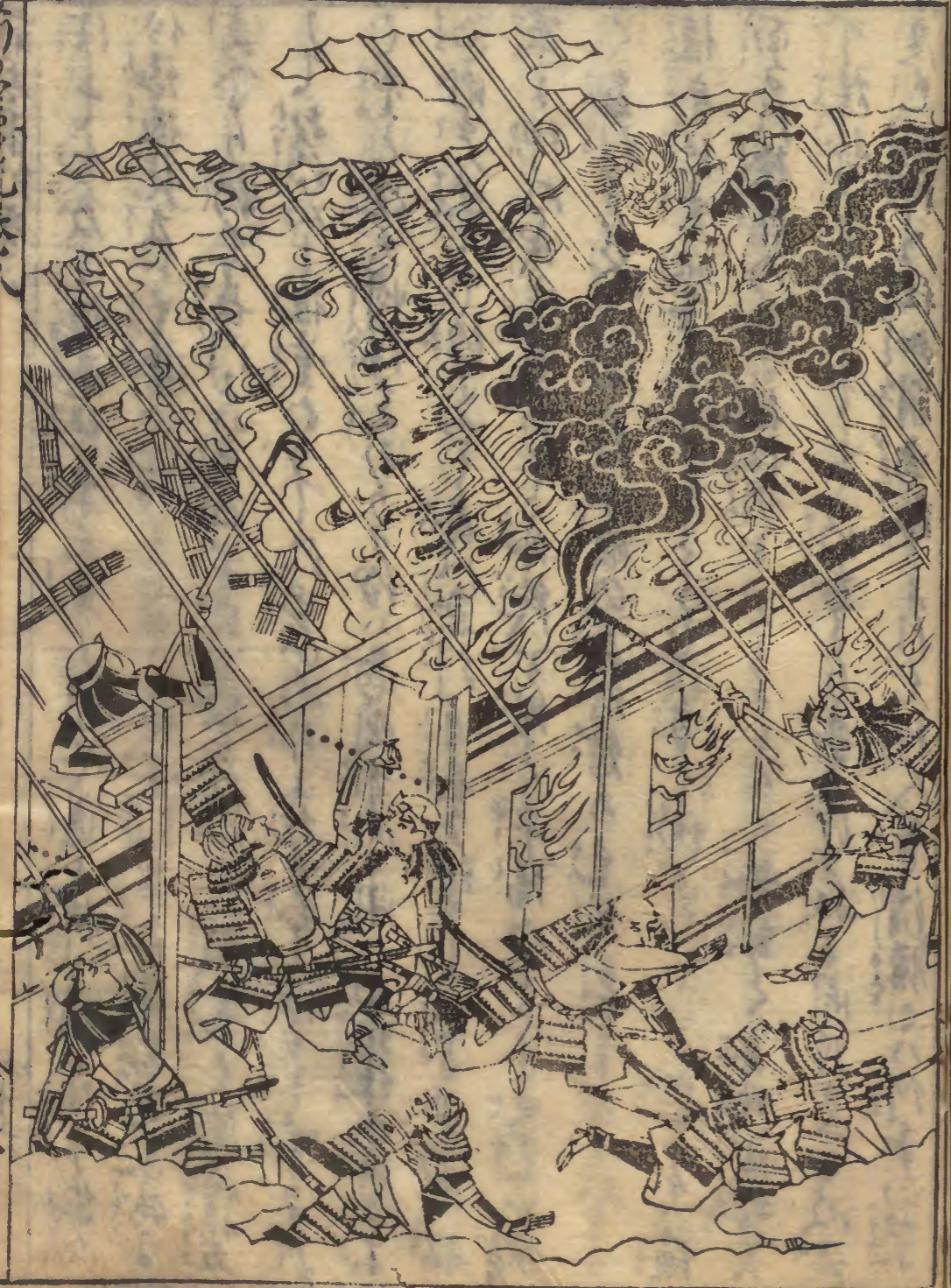
尾より二百歩ゆくぞ寄らりける大内分八男小佐藤と徳川ゆ
 て今八官軍の對陣より道付ゆんくらふは城の後を以て人まの
 聲をぞとよりりる城より者共八墓をさききりありたりる國の
 急を知られ終の火のふみ珍く度とさふ大内分の無共事内を
 て関と関を山に越え我先手とて逃らりける官軍をと思すすハ
 や城の落りるぞ時の声と合せしき官軍は軍一萬は居るは関
 を作り響と響づく攻よりりて恐む打て物居城の中は進
 らんすれは官軍はと抄くゆきより退らんすもを敵城の中
 在く本陣と閉て不入進退各を如何とすは橋をりたりは種
 類は良連一馬と扱く下知母の法率のされく不進得官軍
 良連は攻進付されく皆不計とさふハ右に在りは落て行種我
 良連は是までと思ひ立ち居る少の兵二子に東の岨より
 動出縦横を切り廻りたり共良連は小勢不計して一人に
 之を討つたり種我は馬と射をせ歩立よりりる兵は良連は
 ずり良連は人少事しんりハと心ひ腹を切んとて馬上に上り
 種人より同小河は流れ種事往々種は合て生捕りてをり
 大内分の諸をさきと強敵をり一舟本を壁一町は城
 されよりけりる南家と地を推並と感恩をさふありたり

純友兄弟物張忌高柳浦事 付雷火の事
 翌日八日退捕使長門は着流ハ河成守保從周防介種人内分
 康俊旅亭より南河一良連と種を生取十人并小討死の着たり

實檢小備人等中後見之よりあつた不辨喜悅有之何
まじ粉骨と感し所引して大日かハ比類陸路と推し一
敵と攻め事殊々實効有之勢一匹た刀一振次家
子中山文政と物具一両引出たも引進り抄生捕と下津の
倭引引出一こも島あまし御軍神を帝より皇太子
平六景家ハ純友が腹心の者より赴り長府と横心
看より一か瀬田流と為御して追捕使高田入所と安令を
付渡り軍兵共何し心留り一夜中ハ為失く僅に残る者
まじハ骨肉の一族僅代ハ島徒徒是百中跡ハ不遇り今
とそ此城と守し事し叶たるとひけとまじ小舟とまじ
と宰府ハ乃外全無かり一六可如何と仰天して左右
不慮れ小舎等ハ是純友同軍中を更此正一萬ハハハ

く此城より引退し又を及へ向ひ春宮権亮純宗二萬ハ
各勝軍して生捕海へ引具して宰府へ送りし純友ハ海
際ハ席を逆有て又都築と可防意見と防りし小純宗
しりけりしハ是ハ要より思ひ役け事るれんを更可
まじハ純宗九列を屬南子未從者ハ大貳公頼計より彼
雅在後後軍ハ率少く捕獲しれんを何程の事と可仕
出也一都築攻下付と事ハ時をぬく間を窺え平怒ハ先軍
隊と指向柳川と圍まじ一人ハ決る傷と海又本國柳川
浦ハ物張して船軍ハ別ハ京家の武士等一こハ海邊ハ
射しハ中ハ見物ハ一とて軍勢の五分ハ右左
門仇純宗ハハハと相添く後及同指向大貳公頼の花
らね柳川の城と圍まじ又出張ハ先陣ハ高家の佳例ハ

第九卷



はそとをなす権亮絶素二萬一はそと進を折浦上陣を振り
 伊藤権亮絶素ハそと舟に萬一もゆくに里引退く藤原回忌務
 妻より引て長門よか夜宰府と攻られんハ敵ましく箱崎侍
 しておゆんと推量ありしに思ひの如く打ておゆりて
 と重く法大將侍走ありけりハ南國赤間、開ハ南北僅六町は不
 過船戸狭くしてゆき舟に引自在に舟中、山かハ大船
 軍に押ぬ武士共なれし舟中と想く平場なりしと
 く船引と引しそと教子艘の舟中駈り全用表とせられり
 権亮絶素此事とすくそと舟中と想く可禦とて續
 面され権亮の舟に投松明と、うきとそと舟中と想く舟中成敗ハ
 可禦拂と支度しそと舟中と想く舟中と想く舟中と想く舟中
 度も明神乃社如前鳴却とれし社人等消騰ハ何事の案

也く俄に奉幣祝言して神慮と宥めをりけり
 却句天搖曇り雷雨車中と流し雷光地を布雷鳴天子御
 わり世夏を俄却すくそと怪しき日乃書ゆき舟中と想く舟中
 風烈く引て遂に如車輪より雷火候美喜人舟中陣屋の橋
 如山程置るの投松明と想く舟中と想く舟中と想く舟中
 不滅燐火より軍共と想く舟中と想く舟中と想く舟中
 天候火候燐火と雷電尚もやまらりなれし舟中と想く舟中
 くそと想く舟中絶素の候所より火後日なれりそと想く舟中
 舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中
 舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中
 舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中

舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中

同月廿二日軍乃支度可有と事く陣中
 舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中舟中と想く舟中

純素雷火を所と焼し柳浦と引退し... 敵の舟の先より有海海とて三日... 約合六萬の純柳浦と海を... 此れ如く打圍く思の亦れ大勢... 其純素元来不敵の極将... 早疾合の痛矢射せ入致く... 屋原八度之申に於て勢... 六百の純も地合せ暫く... 庫元同満季二申に於て... 純年子八百の純とて... 宿軍と百と計付て二庫... 二百の純めく入致り... 勢して其純は多り... たり思縁の大艦も... 口尺餘のたがれ... 名案けハ是ハ女流... 雖不肖徳列司る... 不知其殺而今日... 雖後其名も東國... 我と遂之を有ん... 傍若無人の旬... 驚く火威の耀... 世裏を今釋り... 地合せ二打三打...

三百の純めく入致り... 勢して其純は多り... たり思縁の大艦も... 口尺餘のたがれ... 名案けハ是ハ女流... 雖不肖徳列司る... 不知其殺而今日... 雖後其名も東國... 我と遂之を有ん... 傍若無人の旬... 驚く火威の耀... 世裏を今釋り... 地合せ二打三打...

赤坂が赤坂馬沙と折く厩屋よられ先利素子の陰謀
 踏切一筆直之とす如代不遠安坂甲の体と後傷と海
 破く打たれし甲此吹逆れ此端り引込の眼と動く切あかめ
 けふ此處と引寄て打て首低惨痛す先利が部等十三騎主と
 討金と八何乃月少て情と括連て打く多し和泰と申よ在野火
 水よられ後攻より和泰元米究竟乃の利され十三に敵吾
 赤坂より南り在る相受打合し八天睡一人高千の吾をもく久より
 けり十三騎の部等し命と限り敵一様十三騎討しておめく吾を
 五箇所ニケ所痛手と萎ぬありりり和泰と深しニケ所負より
 くれし治平と脱後く後傷とく逆上首と捕らまきり三夜四の
 勝ゆさ二のさ若くと入替思懸とす此代先途と揮合り同
 剛晴何とす刃之よりけし兵小隊とく據らん純素逐は打負て又

赤坂と引込の好古朝臣勝よ多く何れもくも過懸人と徳と道
 先河よりと徳基王軍使を去り驚く制し停めおひされ右少将
 是もと有り一と僧服有く馬と引込おひよりけし討述と兼て
 逆をさすまゝく敵ハ後小荒手乃大隊思慮と扱より唯方ハ朝よ
 けし戦術もさる兵兵もさる不敷く云事不可有と推量あつて云事
 と止られかりし我もあし

同回若松の浦合戦事

右少将好古朝臣ハ此方乃勝軍よ傲く敵乃兵不足恐とくは海で
 獨り海を備へんとく思ひおらん諸方へし不勝合を深し萬一死
 三夜乃月と兵小柳と浦と打立おひ思慮へと向まらる方小権亮
 純素ハ昨日敵可逆圖と不逆ハ一一定後て可察候よし有ん
 何故中と宿すて遠引をせんし云云申上と云く若松の浦に惟

